今　山　遺　跡

第７次調査の報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第584集

1998

福岡市教育委員会

今山遺跡正誤表

ページ	行	誤	正
目次	第２図	今山遺跡調査地点一覧	今山遺跡調査地点
目次	第３図	調査地点位置図	周辺地形図
6	第３図	(1/500)	(1/400)
11	13	考えられる。底径	考えられる。27は底径
写真４		17	18

序　　文

今山は、博多湾西部に突き出た標高82mの独立した山で、花崗岩と玄武岩から成っています。今山では、その玄武岩を利用した弥生時代の石斧を製作しており弥生時代の石器製作を知る上で重要な遺跡として、国の史跡に指定されています。今山製の石斧は、北部九州一円に分布し、その規格性の高さと分布の状況から、専業集団の存在が指摘され、福岡市西部から前原市にかけて勢力を張った伊都国の繁栄の一端を担っていたと考えられています。

今回、この今山の南麓に下水道が敷設されることになり、事前に発掘調査を実施いたしました。発掘の結果、遺構は発見されなかったものの、石斧の未製品の他、中世の陶磁器・土器、それと同時期と考えられる製鉄関係の炉壁、多くの鉄滓が出土し、従来とは異なる今山遺跡の一面を見せてくれました。

本書が市民の埋蔵文化財への理解と認識を深め、また研究資料として利用されましたら幸いです。

平成10年３月25日
福岡市教育委員会
教育長　町田英俊

例　　言

1　本書は福岡市下水道局が企画した、今宿地区下水道築造工事に伴い、福岡市教育委員会が平成８年７月25日～７月29日まで行った、埋蔵文化財の事前調査の報告である。
2　本書に掲載した、写真の撮影、遺物の実測、製図は米倉秀紀が行った。
3　本書の遺物番号は通し番号で示し、図と図版の番号を一致させた。
4　本書の編集・執筆は米倉が行った。
5　本書に関わる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

目　次

本文目次

序文……1
例言……1
目次……2
1　調査に至る経緯と調査の経過……3
2　遺跡の立地と環境……3
3　調査の記録……6
（1）調査の概要と層序……6
（2）出土遺物……7
4　まとめ……12

挿図目次

第1図　今山遺跡位置図……4
第2図　今山遺跡調査地点一覧……5
第3図　調査地点位置図……6
第4図　土層柱状図……6
第5図　出土遺物Ⅰ……8
第6図　出土遺物Ⅱ……9
第7図　出土遺物Ⅲ……10
第8図　出土遺物Ⅳ……11

写真目次

写真1　調査区の状況……13
写真2　土層の状況……13
写真3　出土遺物Ⅰ……13
写真4　出土遺物Ⅱ……14
写真5　今山遺跡遠景……裏表紙

遺跡調査番号　9622　　遺跡略号　IMY7　　分布地図番号　119　0116
調査地地積　福岡市西区横浜1・2丁目地内
開発面積　1800㎡　　調査対象面積　45㎡　　調査面積　45㎡
調査期間　1996年7月25日～29日

1　調査に至る経緯と調査の経過

福岡市は、現在市域一帯に下水道の敷設を行っているが、福岡市教育委員会では、そのうち調査可能な地点について、事前の発掘調査を行っている。平成８年度には、弥生時代の石斧製作遺跡として名高い、国指定史跡の今山遺跡の南麓で下水道築造工事が行われるため、福岡市下水道局の事前調査依頼の提出を受け、同年７月４日に試掘を実施した。その結果、申請地は、丘陵の下で遺構は検出できなかったものの、遺物が多く含まれていることから、発掘調査を実施した。

調査は同年７月25日～７月29日まで行った。試掘時に遺構が存する可能性がなく、遺物包含層が厚くあるため、調査は遺物包含層からの遺物の採集と土層の確認を主な目的に行った。まず、機械で表土・客土を除去した後、遺物包含層を隣接する空き地に広げ、その中から遺物を採集した。遺物包含層を取り去ると、激しい湧水のため壁面が崩壊し、危険防止のため、土層のメモをとっただけで埋め戻した。そのため詳細な土層実測図や写真はほとんどとることができなかった。

調査対象地は幅１m、長さ45mに及んだが、そのうちの南半は、50cmに近い厚さのコンクリートのため、調査不可能であった。地元の人の話によれば、旧海軍の飛行挺格納庫があったといい、あるいはその基礎かもしれない。

調査組織

調査委託　　福岡市下水道局

調査主体　　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

埋蔵文化財課長　荒巻輝勝

第１係長　横山邦継（前任）　二宮忠司

調査担当　米倉秀紀

庶務担当　小森　彰

整理作業　蜂須賀博子　竹田弘子

2　遺跡の立地と環境

博多湾は鶴翼状に東西に広がっているが、その翼の根本の西端付近は、さらに西に湾入し、今津湾を形成している。今津湾は、江戸時代以降の埋め立てによって、小さくなっているが、本来は現在の今宿あたりまで深く湾入していた。今山は、その今津湾に突き出た砂嘴の先端部にとりついた独立の山で、現在の標高82mを測る。今山からは、玄武岩と花崗岩が産出され、戦前に元岡飛行場建設のためにそれらを切り出すため、トロッコを山全体に敷設した。そのため山の頂部は２つに分割され、山全体の地形の改変も行われている。また山の北側には、戦後住宅団地が造成され、旧状をとどめていない。これらの改変にも関わらず、過去の調査では良好な石斧製作遺構等が検出されており、今山遺跡の重要性を減ずるまでには至っていない。

過去の調査は６回行われている。古くは旧石器時代の三稜ポイントが西側山麓で採集されている。縄文時代の明確な活動の痕跡はないが、山頂部で、小型で薄手の打製石斧状の未製品が製作されており、あるいは縄文時代後半までさかのぼる可能性がある。太形蛤刃石斧が製作され始めた明確な時期は、第２次調査の成果によれば弥生時代前期末からである。石斧の製作工程は、大略の工程は同じであるとしても、素材に応じた作り方をしていることも判明している。今山の南100mの砂嘴上には甕棺群がつくられており、今山の石斧製作者集団の墓地と考えられる。その地点の溝からは、研ぎなおした細形銅剣が１点出土している。

古墳時代では、第１次調査で庄内系土器を伴った製塩土器が出土している。また、第５次調査ではそれ以降と考えられる製塩土器も出土している。製塩土器は、1997年度調査の今宿遺跡でも出土しており、この一帯で古墳時代に製塩が行われたことが判明しているが、明確な遺構の検出までには至っておらず、詳細な実体は明らかではない。今山の南斜面には、横穴式石室を持つ熊野神社古墳がある。第６次調査では、７世紀後半代の製鉄関連と考えられる遺構が検出されている。時期は異なるものの、本調査の製鉄関連遺物を考える上で、興味深い。古墳時代以降、当地では製塩・製鉄の地として利用されていたと考えられる。

今回の調査地点は今山の南麓で、山麓が崖になったその下に位置する。崖との比高差は５mに及び、調査地点の標高約２mである。調査地点は今山遺跡の範囲外であるが、南麓隣接地であり、山からの落下遺物の出土が期待された。

第１図　今山遺跡位置図

1　今山遺跡　2　今宿砂丘遺跡　3　丸隈山古墳　4　今宿大塚古墳
5　平原遺跡　6　怡土城　7　野方遺跡

第2図　今山遺跡調査地点（1／5,000）

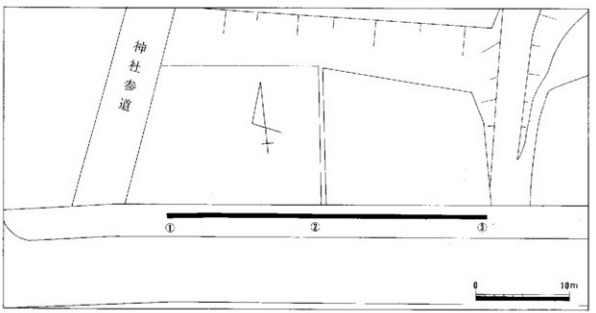
3　調査の記録

（1）調査の概要と層序

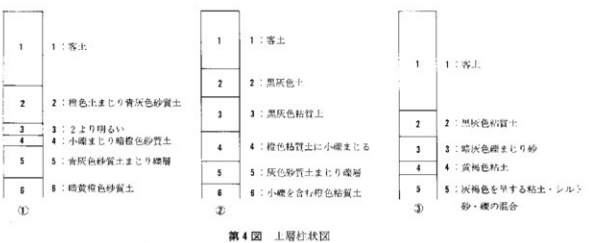
調査は、下水道が敷設される部分の幅1m、長さ45mを対象に、包含層からの遺物のとりあげと、土層の確認を主目的に行った。しかし、前述のとおり、包含層を除去すると、湧水のためトレンチ壁面が崩壊したため、土層図の実測を行うことができず、メモ程度の土層柱状図しか記録できなかった。

柱状図は下記のとおりである。客土の下は耕作土と考えられるが、③地点では確認できなかった。近世以降の干拓によってできた層と思われる。遺物包含層は、②地点の3層と③地点の2層である。①地点では包含層はなかった。包含層には中世の遺物が入っているのを確認した。この遺物包含層の下は、礫を多く含む砂もしくは砂質土で、海性の層ではないかと考えられるが、具体的な時期はわからなかった。また、数点出土した弥生時代の遺物もどの層に包含されていたものかはわからなかった。

②地点付近で、礫層が60cmほど東に落ち込んでおり、新旧の地形図を考慮すれば、神社参道付近は、南にやや張り出した地形をしていた可能性が強く、①地点で明確な包含層が見られなかったのは、参道の東の谷部に崩落土砂が流れたためと考えられる。



第3図　調査地点周辺地形図（1/500）



第4図　土層柱状図

（2） 出土遺物

前述のとおり、出土した遺物は機械で掘り上げた包含層に含まれていたもので、石斧未製品4点と剥片が少量、叩き石1点、数点の弥生土器のほか、古代末から中世前半期の土器・陶磁器・石鍋、さらに中世期と考えられる鉄滓が付着した炉壁等が多く出土した。総量はコンテナ3箱である。以下、遺物の種類毎に詳述する。

（1）石斧未製品

玄武岩製の磨製石斧の未製品は4点出土した。1と2は大形の石斧未製品である。1は頭部の破片で、現存長11cm、幅10.4cm、厚さ5.8cm、重量904gを測る。左面は左右からの大きな剥離で整形し、右面は小さな剥離の連続で整形している。断面形は右面が平担な三角形を呈する。2も1に近い形態を呈している。現存長12.2cm、幅11.5cm、厚さ3.4cm、重量511gを測る。左面の左からの大きな剥離は新しい剥離で、石斧製作時のものではない。本来の全形は1に近いものと推察できる。全体に鉄分が付着し、剥離が極めて見えにくい状態にある。ともに　打を行う前の段階のものである。5は小形の石斧未製品で、現存長8.7cm、幅6.1cm、厚さ2cmを測る。破片の上部の両側に抉り状の剥離があり、あるいは小形の打製石斧の未製品かもしれない。第6次調査の今山頂上部の調査ではこれと似た形態の未製品が出土している。3は敲打を施した未製品である。現存長10.6cm、幅6.7cm、厚さ5.7cm、重量391gを測る。

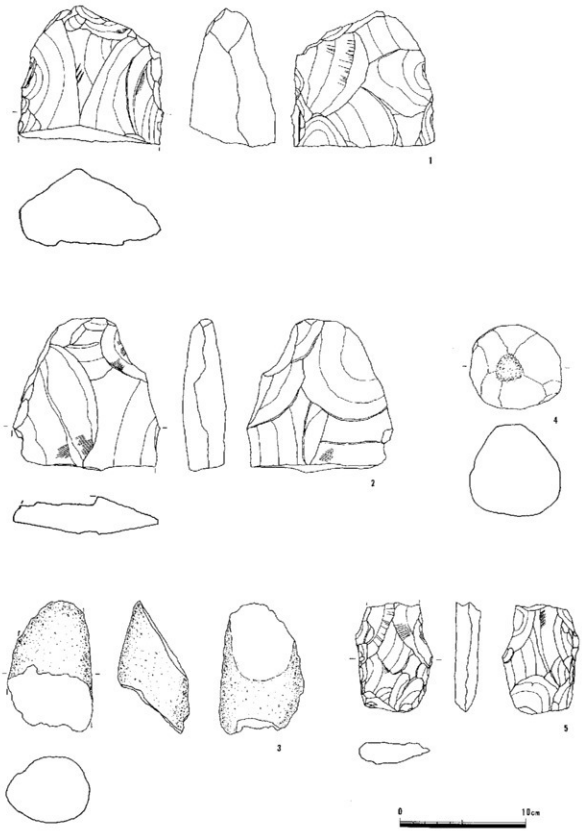
（2）石器

4は玄武岩製の叩き石である。長さ7.4cm、幅6.7cm、厚さ7.3cmを測る。全体の形状はおむすびの形を呈し、その上部に敲打痕が残る。もう一ケ所それに似た部分があるが、摩滅のため、明瞭ではない。

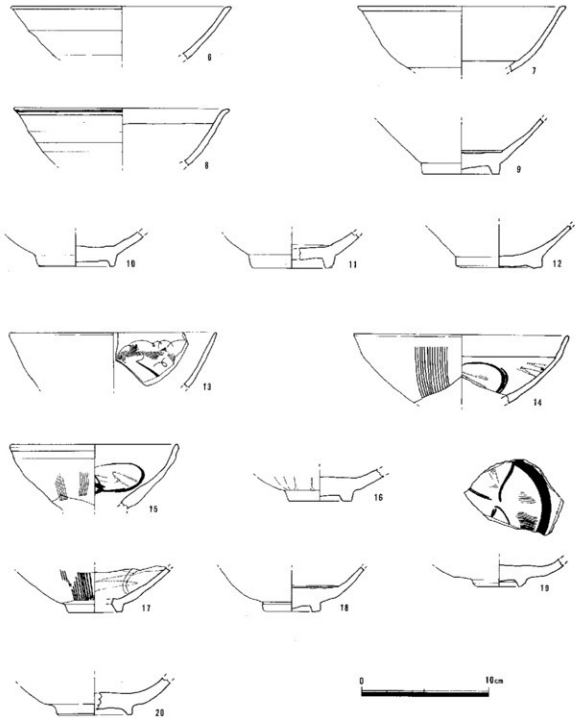
（3）陶磁器

6～12は白磁である。6は口縁端部がわずかに外反する。口径17.4cmを測る。現存部分では、内面には全面施釉しているが、外面には上半部しか施釉していない。釉調はやや青味を帯びている。胎土は明緑灰色で黒色粒を多く含んでいる。7は口径17cmを測る。口縁端部は肥厚し、口唇部は平担面を形成している。両面ともほぼ体部全面を施釉し、釉調は明オリーブ灰色を呈する。胎土は灰白色で、黒色粒を多く含んでいる。8は口縁端部がわずかに外反し、口唇部はやや丸みを帯びているが、平担面に近い形を作っている。口縁直下外面には釉を厚くかけ、沈線状に2本の線が認められる。また内面の体部上部にも幅1mm以下の沈線が施されている。さらにその下に途中で幅の異なっている線が施されている。9～12は底部片である。9は高台径6cmを測る。見込み周縁部と体部下部以下は露胎である。釉調は白色の半透明釉で、胎土は灰白色で、黒色粒を含んでいる。10は高台径6cmを測る。外底部を除き、ほぼ全面施釉している。見込みと体部内面との境には沈線状に段を作り出している。釉調は緑がかった白色で、胎土は灰色で黒色粒を多く含んでいる。11は見込み周縁部と外面下部以下が露胎である。釉調は灰白色で、胎土は灰白色で黒色粒を含んでいる。12は高台径6cmを測る。外底部は低く、高台畳付との比高差は1mmしかない。高台は全面面取りしている。内面は全面に施釉している。体部下部には幅2mmの沈線を1条施している。釉調は緑がかった白色で、胎土は灰白色で黒色粒を含んでいる。

13～20は青磁である。13龍泉窯系の碗で、口径16.4cmを測る。体部はほぼ直線的に外傾している。内面に櫛描き、ヘラ描き文様を施している。釉調は暗オリーブ色で、胎土は明緑灰色で、黒色粒を多く含んでいる。14は同安窯系の碗で、口径17cmを測る。口縁直下で「く」の字に折れ曲がっている。内面にはヘラ描き・櫛描きの文様を施し、外面には縦方向に、16本を単位とする櫛で線を引いている。釉は灰オリーブ色で、胎土は淡い青灰色で、黒色粒を含んでいる。15は同安窯系の碗で、口径13.1cm

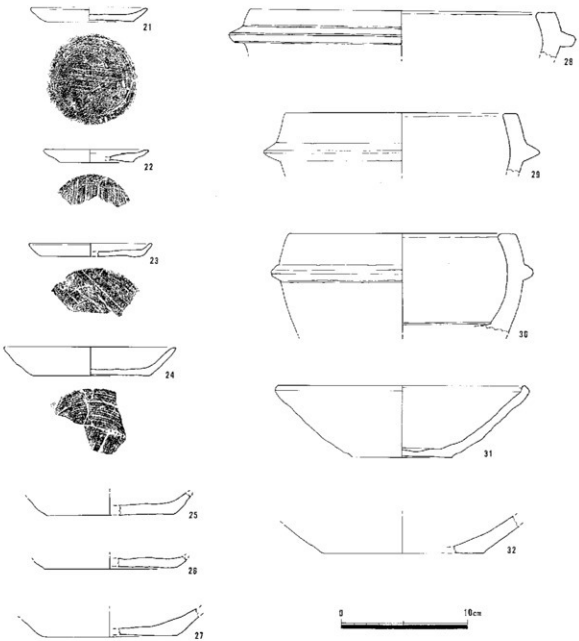


第5図　出土遺物Ⅰ（1／3）



第6図　出土遺物II（1/3）

を測る。口縁直下で「く」の字に折れ曲がる。内面にはヘラ描き・櫛描きの文様を施している。外面の櫛描きは不鮮明で明瞭ではなく、10数本を一単位としている。外面高台近くは露胎である。釉はオリーブ灰色の半透明釉、胎土は灰白色で黒色粒を多く含んでいる。16は碗の底部で、高台径5cmを測る。体部外面に蓮弁文がかすかに認められる。外底部のみ露胎で、他の全面に明オリーブ灰色の半透明釉を厚く施している。胎土は灰白色で、黒色粒を多く含んでいる。17は同安窯系の碗底部で、高台



第7図　出土遺物III（1／3）

径5.3cmを測る。外面に12本を単位とする櫛による縦線を描き、内面には櫛描き・ヘラ描きの文様を施している。釉はオリーブ黄色、胎土は青灰色で黒色粒を少量含んでいる。18は碗の底部で、高台径4.6cmを測る。外底部とその周辺の一部が露胎である。内面見込と体部の境に沈線を１本施す。釉は暗オリーブ色、胎土は灰白色で、黒色粒・橙色粒を少量含む。19は碗の底部で、高台径4.1cmを測る。見込に櫛描きとヘラ描きの文様を施している。高台畳付をヘラ切りしているが、図面のように大きくカットしているのは残存部分（約１／２）のさらに半分のみである。釉は灰オリーブ色、胎土は灰白色で、黒色粒を含んでいる。20は龍泉窯系の蓮弁を施した碗で、両面とも貫入が見られる。外底中心部のみ露胎である。釉調は、外面は灰オリーブ色、内面はオリーブ灰色である。胎土は青灰色で、黒色粒を含んでいる。

（4）土師器・土師質土器

21～23は皿で、いずれも底部糸切りである。21は完形品で、口径9.3cm、底径6.7cm、器高1.15cmを測る。底部と体部の境はやや丸みを持つ。板目痕が明瞭に残っている。22は口径7.3cm、底径4.8cm、器高1cmを測る。外底部には板目痕が残り、底部と体部の境は明瞭な稜をもつ。色調は赤色顔料を塗ったように赤色を呈する。23は口径9.6cm、底径7.9cm、器高1cmを測る。板目痕が残り、底部と体部の境はやや丸みを帯びている。胎土はいずれも1mm以下の砂粒・金雲母を多く含み、色調は22を除き、淡黄橙色～橙色を呈している。

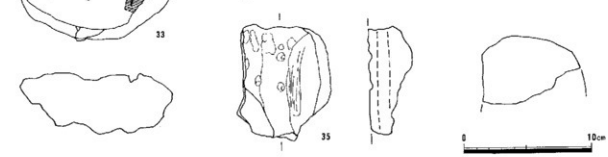
24は～26は坏である。24は1／4の破片だが、破片内には板目痕は確認できない。口径13.4cm、底径9.3cm、器高2.3cmを測る。25は底径10cm、推定器高2cm前後を測る。26は底径10.4cmを測る。ともに摩滅がひどく、調整は確認できない。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には金雲母を多く含んでいる。3点とも底部と体部の境には明瞭な段をもっている。

（5）須恵器・須恵質土器

27・31・32は鉢の底部と考えられる。底径10.5cmを測る。底部と体部の境付近は1cm以上の器厚をもつが、底部は6mmと薄い。31は口径19.7cm、底径8cm、器高5.8cmを測る。体部ははぼ直線的に外傾し、口縁端の内面を中に突出させている。器面全体に、整形時の凹凸が明瞭に残っている。また外底部には糸切り痕が残っている。32は底径12.8cmを測る。整形時に、外底部の粘土を体部側に押し上げており、それが結果として段として残っている。外底部にハケメ状の調整痕が残っている。

（6）滑石製石鍋

28は口径24cm、鍔部の径27.4cmを測る。鍔の断面形は台形に近いが、端部は鍔より下の体部に平行に削っている。鍔の下の面にススが付着している。29は口径18.1cm、鍔部の径21cmを測る。鍔の先端部は丸みを帯び、上辺の狭い台形に近い形状を呈している。現存している破片部分にはススの付着は見られない。30は口径17.8cm、鍔部の径20.6cm、推定器高8.5cm前後を測る。鍔の断面形は台形を呈している。外面には全面に削り痕跡があり、ほぼ全面にススが付着している。このほか平面長方形の石鍋の把手が出土している。



第8図　出土遺物Ⅳ（1／3）

（7）製鉄・鍛冶関連遺物

製鉄・鍛冶関連の遺物は鉄滓・炉壁などコンテナ1箱分出土した。遺構に伴ったわけではないので、時期的には不明瞭な点が多いが、他の出土遺物から中世中頃に位置づけられる可能性が高い。

遺物は椀形鍛冶滓2点の他、炉壁・ガラス質滓である。総重量は7.5kgで、そのうち椀形鍛冶滓0.9g（12%）、炉壁6.0g（80%）、ガラス質滓0.6g（8%）で、大半が製錬作業に伴う遺物である。

33は椀形鍛冶滓である。出土遺物の中で、椀形鍛冶滓はこの1点である。平面は12.2cm×10cmの長円形を呈し、厚さ5cmを測る。重量660gで、メタルは残っていない。表面は錆化した部分がかさぶた状に剥落しているが、全体に平滑である。また上面は平坦であるが、中央部分が径3cmほど緩く窪んでいる。また上面には木炭痕が多く付着残存している。底部には上面との境部分にわずかに炉壁によるものと考えられる土が付着している。また底面全体に径1～3mmの砂粒が疎らに付着している。34は炉壁の上部破片である。重量180gで端面は残っていない。炉内側表面は酸化により厚さ5mmで赤褐色を呈する。この外側は熱をほとんど受けておらず、炉材粘土は灰白色を呈し、溶け出している。また炉材には径2～5mmの砂粒及びスサを多く含んでいる。35は炉壁中位浴解部分の破片である。炉内側表面はガラス化し平滑であるが、径1cm以下の気孔が数か所に見られる。また表面に工具痕状の擦痕が残っている。内側表面のガラス質部分は厚さ8mmで、その外側には炉壁の遺元帯が厚さ1cm程度残っている。さらにその外側には酸化した炉壁が厚さ2cm以上本来は残っていたと考えられる。炉材はスサ及び径2mm～5mmの砂粒を多く混ぜており、34と同質の炉材である。36は用途不明であるが、流出孔を塞ぐものであろうか。平面的にはやや裾広がりに開き、断面は長辺8cmを測り、やや彎曲する長方形を呈すると考えられる。表面は縦方向のケズリによって整形されている。表面は一部が灰白色化するが、ほとんど橙色を呈し、2次的に強い熱を受けた痕跡はない。

4　まとめ

当調査区は、今山の南崖下にあるため、遺構は存在しなかったものの、中世中頃と考えられる製鉄関連の遺物が出土した。出土した炉壁・鉄滓は大半が製錬作業に伴う遺物であり、調査区近辺での操業が考えられる。この中には炉底塊はなく、炉壁のほとんどが中位以上の部位であり、送風孔以下はほとんど含まれていない。中世の製錬については古代からの技術を継承・発展させ組織的に行うものと、鍛冶工人等が零細に行うものの2者の存在が考えられる。工房があったと考えられる調査区北側一帯は、海岸に面した山裾の標高の低い地点であり、中世にはこのような低地において後者のような操業が行われていた可能性が指摘されている。資料数が極めて少ないものの、時期・立地から考えて、本調査地点出土の炉壁については、後者に見られるような零細な製錬作業に伴うものである可能性が考えられよう。

出土した陶磁器・土師器は13～14世紀に属するもので、この時期は今山の北の今津が貿易港として賑わっていた頃で、栄西が今津に聳顕寺を建立した約100年後、蘭渓道隆開基と伝えられる勝福寺が建立した時期にあたる。今津の中世の街はいまだに調査されていないものの、今津砂丘遺跡出土の陶磁器群や、今回出土した同安窯系・龍泉窯系の陶磁器群はこの今津の繁栄の一端を物語っている。

今山遺跡といえば、弥生時代の石斧製作跡として有名であるが、今回の調査では、以上のように今まで明らかではなかった今山・今津の歴史の一端を明らかにしたと言えよう。

写真 1　調査区の状況

写真 2　土層の状況

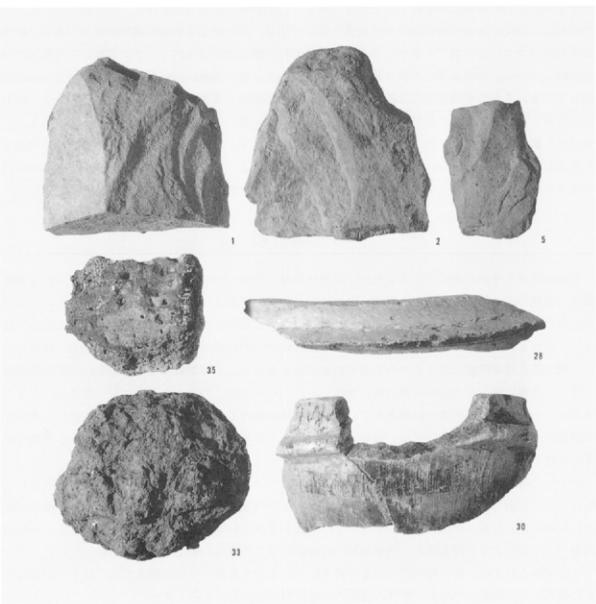


写真 3　出土遺物 I

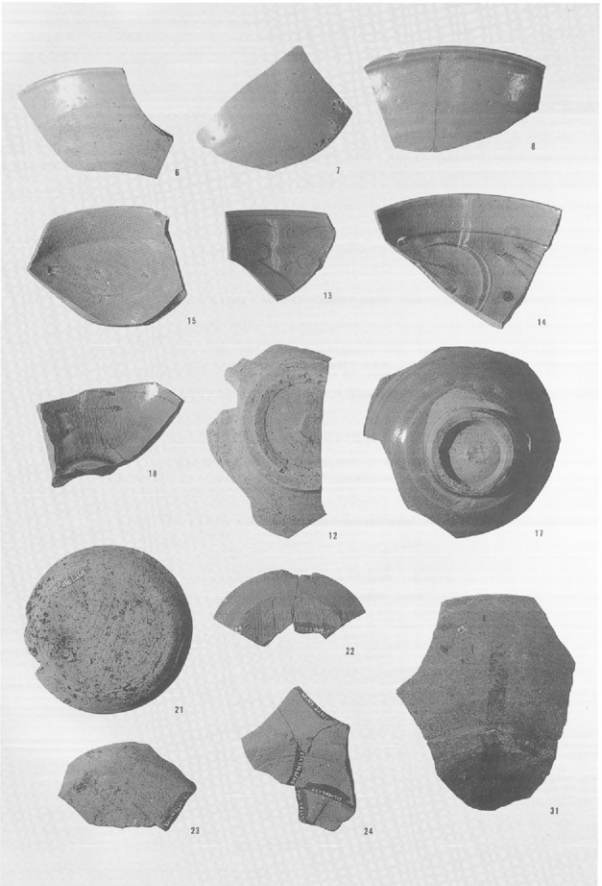


写真4　出土遺物II

写真5　今山遺跡遠景

今山遺跡

第7次調査の報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第584集

1998年（平成10年）3月25日　発行

編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷　和光印刷株式会社
福岡市博多区上牟田1丁目18番5号

1998　福岡市教育委員会